

## 納西文化圏のチベット語・永勝県大安[Daan] 方言 の方言所属

著者	鈴木 博之
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	34
号	1
ページ	167-189
発行年	2009-10-30
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00003919">http://doi.org/10.15021/00003919</a>

## 納西文化圏のチベット語・永勝県大安 [Daan] 方言の方言所属

鈴木博之\*

### Dialectal position of Daan Tibetan spoken in the Naxi cultural area

Hiroyuki Suzuki

チベット語が分布する地域の南東端を占める中国雲南省迪慶藏族自治州のさらに南に位置する麗江市において、いくつかチベット族の村落が点在する。永勝県大安納西族彝族郷はその1つであり、今なお同地のチベット族はチベット語を話していることが筆者の調査によって判明した。しかしながら長期にわたるナシ語や漢語の影響を受け、現在では漢語への移行が進み、すでにその話者数は激減している。

本稿の目的は大安郷のチベット語 Daan 方言のカムチベット語における方言所属を明らかにすることである。この議論は主に方言間の比較によって成立する。地理的環境や民間伝承を考慮して、比較対象として最も近くに分布する迪慶州の諸方言を射程に収める。具体的に比較する言語現象は2点あり、1つはチベット文語形式と口語形式との対応関係の分析で、もう1つは語形式の分析である。これらの作業を通して、Daan 方言の方言所属を考察する。

本稿の具体的な構成は、まず Daan 方言のチベット文語形式と口語形式との対応関係を明らかにし、それによって得られた特徴と迪慶州のチベット語方言の特徴を比較する。そして Daan 方言に見られる特徴的な語形式を迪慶州のチベット語方言の例と比較し、考察を加える。考察の結果、Daan 方言は Sems-kyi-nyila 方言群全般の特徴と近似し、特に破擦音/摩擦音の発展過程において同方言群の Melung 下位方言群の特徴と一致することが判明した。

---

\* 日本学術振興会特別研究員，国立民族学博物館外来研究員

**Key Words** : Tibetan, Naxi Nationality, dialectology, dialect classification

キーワード：チベット語，納西族，方言学，方言分類

There are several villages populated by Tibetans in Lijiang Municipal Region, the southeastern neighbourhood of Diqing Tibetan Autonomous Prefecture, where the Tibetan language is mainly spoken. The author has found that the Tibetan inhabitants still use Tibetan in Daan village, Yongsheng County in Lijiang, but this dialect is close to extinction because of the strong influence of Naxi and Chinese.

This paper aims to clarify the dialectal position of the Daan dialect of Khams Tibetan using a comparative method involving both comparison of using a sound correspondences between spoken forms and Written Tibetan (WrT) in multiple Tibetan dialects, and also word forms. In consideration of the geographical situation and the folklore of the Daan Tibetans, the scope of the dialectal comparison covers the dialects spoken in Diqing Prefecture, which can be divided into three main groups: Sems-kyi-nyila, nJol and gTorwa. Of those, the dialects of the Sems-kyi-nyila and nJol groups are compared with the Daan dialect.

The main matter consists of three parts: sound correspondences between WrT and the Daan dialect, comparison of the latter with multiple dialects of Diqing, and comparison of several characteristic word forms. The paper concludes that the Daan dialect is genetically close to the Sems-kyi-nyila dialect group, especially to its Melung subgroup, based on the sound development of the affricate / fricative series.

1 はじめに	3 Daan 方言における蔵文と口語形式の対応関係
1.1 大安郷のチベット語概況	3.1 初頭子音
1.2 大安郷のチベット族の出自	3.2 母音および母音+末子音
1.3 Daan 方言をめぐって	4 迪慶州のチベット語方言との比較
2 Daan 方言の音体系	4.1 蔵文対応形式に関する比較
2.1 音体系の素描	4.2 語彙項目に関する対照
2.2 音体系からみる Daan 方言の特徴	5 まとめ

## 1 はじめに

雲南省北西部の一角、迪慶族自治州はチベット語が分布する地域の南東端に当たる。確かに、チベット語を話すチベット族が集住しているのは同地域までであるが、実際は同州のさらに南部にも小さなチベット族の集落が複数存在する。迪慶州の南東部と接する麗江市の中の永勝県大安納西族彝族郷は、そのような点在するチベット族の集落を含む地域の1つであり、同地で今なおチベット語が話されていることが現地調査によって判明した。

本稿では、大安郷のチベット語についてチベット語方言学上の方言所属を議論する。

### 1.1 大安郷のチベット語概況

大安郷の属する永勝県は麗江市西部に位置し、納西族の集住する地域に隣接する。筆者がこの地域にチベット語が話されていることを知ったのは、迪慶州の友人を通してである。大安郷は迪慶州と近接する地域とはいえず、また納西文化圏の中心地である麗江古城よりさらに南東に位置する地域であるため、チベット語方言研究上全く注意を払っていなかったが、迪慶州の友人から大安郷には迪慶州のチベット語とは全く異なるチベット語を話す人々がいるからその言語を調べてほしいとの要請を受けて、2008年2月（春節/旧正月）に筆者はその友人とともに大安郷を訪れることができ、主に基礎語彙の収集を行った。

現地調査では、主に3人の異なる年齢層（30代、50代、60代）の協力者からの語彙調査を行うとともに、大安郷における言語使用状況についての聞き取りや観察を行った。初歩的な分析の結果、この言語はチベット語の1方言であることが確認できた（以降この言語を「Daan方言」と呼ぶ）。また、音声・語彙面で若干年代差が見られ、特に借用語について老年層ではナシ語から、若年層では漢語からの借用が多いことが目立った特徴といえる。老年層の発話におけるナシ語からの借用語は特に生活用具、食品などの名詞に多い。若年層ではナシ語来源借用語が漢語に置き換わっているだけでなく、動詞、形容詞にも漢語からの借用が見られる。調査後に文献を調べたところ、大安郷のチベット語については、若干の情報が《麗江地区民族誌》(2001: 253)に記述されているほかは、言語学的な研究は発表されておらず、したがってどのような性格の方言であるかは文献から知ることはできない。

Daan 方言の使用状況について簡単に触れておくと、《麗江地区民族誌》(2001: 247)によると、永勝県のチベット族の人口は 1990 年で 859 人を数えるが、現段階では Daan 方言の十分な運用能力を持つ人は極めて少数の老年層の人々に限られ、十数人にとどまると見られる。若年層ではごく簡単な発話を理解するにとどまり、日常生活の多くの場面で話す機会がないため、もはや話せない人が圧倒的に多い。日常生活の言語使用はほとんど漢語によって取って代わられている。大安郷のチベット族は主に同郷下村に集住しているが、この村では家庭内でチベット語の使用が比較的多いけれども、幼児に対しては漢語で話しかける場面を頻繁に見かけた。現在、チベット族と他民族の通婚が行われている家庭では交際用語が漢語に固定化されつつあり、ほぼ次世代へのチベット語の伝承は行われていない。以上のような使用状況から推断するに、1 世代後にはほぼ Daan 方言は消滅するものと考えられ、消滅の危機に瀕するチベット語方言の 1 つといえる。

## 1.2 大安郷のチベット族の出自

《麗江地区民族誌》(2001: 247)によれば、土地の人々の言い伝えに基づくものとして、大安郷のチベット族は明代に麗江を支配していた木氏土司(納西族)によって、周辺地域の防衛のために現在の西藏自治区芒康県塩井郷周辺から移住させられた人々に起源を持つという。このことは、現地調査において現在もなお伝承されていることを確かめることができた。その伝承によると、当時 8 戸の家族が移住させられ、同地に定住し、木氏土司による庇護を受けたとのことである。いずれも口頭伝承によるものであり、漢籍などの歴史書における記載の有無は未確認であり、伝承が史実であるかどうかは分からない。仮に史実とするならば、山田(2008: 80)を参考にすると、麗江の芒康方面への進出は 16 世紀前半ごろと推測でき、このころ以降の出来事だろう。

現在、大安郷のチベット族は、民俗風習についてはほぼ納西化したと自認する。地元民はこのことを木氏土司の影響によると考えている。チベット族の人々は姓を持ち(「和」姓が多い)、チベット名を持っている人は極めて少ない。日常的に身につける民族衣装は麗江(玉龍)納西族のものと酷似し、また同郷に居住する納西族と見分けがつかない。住居にはチベット族に特有の構造を見出せないものが多い。宗教はチベット仏教(カルマ派)であるが、これは納西族とも共通する。寺院は文化大革命時に破壊され、現在再建が進んでいる。

言語面を見ると、以前ではチベット語とナシ語の 2 言語併用を主とし、中には漢語を加えた 3 言語併用の話者がいたが、現在では漢語のみの単言語使用に移りつつある

段階に来ている。チベット語はチベット族の家庭内で用いられ、他民族との交流にはかつてはナシ語が用いられていた。しかし学校教育が普及すると漢語の使用頻度が増え、少数言語が用いられる割合が急速に減少したと見られる。特に文革後に学校教育を受けた世代から極端に漢語化が進行したようである。さらに地元民は、異なる民族間の通婚が徐々に増加し家庭内でも漢語の使用割合が増したことも漢語化に拍車をかけていると指摘する。このような多言語併用の中でチベット語を保持してきたとはいえ、民話や民謡などはほぼ伝えられていない。上述の出自に関する伝承は伝えられているが、チベット語では語れないとのことであった。言語のみが現在まで残っているといえるが、チベット語による口承文化の伝承はもはや行われていないものと推測される。

伝承される歴史的経緯が史実であるかは判然としなければいられないが、現在の大安郷のチベット族によると、迪慶州など他のチベット族居住地域との接触は極めてまれであるということであり、チベット族の中で孤立した環境にいることは事実である。

### 1.3 Daan 方言をめぐる

以上に述べた背景から、歴史言語学的観点から Daan 方言を見ると極めて興味深い問題がある。まず、この方言が未記述であったことから、チベット語方言として方言所属を探らなければならない。またその過程において、チベット語方言からの隔絶された環境の中で Daan 方言がいかに発展してきたかという問題も考察される。そしてその結果から上述の民間伝承と符合するかどうか検討できる可能性がある。仮に民間伝承を正確なものとすれば、移住から現在までの最長約 500 年間、ほぼ他のチベット族との直接的交流を持っていないという点で、他のチベット語方言と比較してもまれな環境にあったことになる。また Daan 方言に対するナシ語などの影響を考えるのも興味深い問題である。

本稿では、直前に述べた Daan 方言の方言所属についての考察を試みる。というのは、以上に述べた諸問題のうち、方言所属をめぐる問題については議論の方法論が整っていると考えられるからである。チベット語の場合、適切な音声方面の指標に基づいて考察を進めれば、かなりの程度明確な結論が得られる可能性が高い。この議論は、主に方言間の比較によって成立する。民間伝承や現在の状況を考慮して、Daan 方言の分布地域に近い地域の方言を対象とした比較が最も有効であろう。

まず資料の面では、迪慶州の主要地点の方言資料はほぼそろっており、迪慶州内の方言分類はすでに判明している（鈴木 2008b）ため、その資料の利用に問題はない。た

だし現在、諸事情により西藏自治区内の方言調査は困難であり、芒康県のチベット語方言がいかなるものであるか、その全体像は不明であるが、複数の地点のわずかな方言資料は入手している。これらの資料との比較を通して分析を行えば、Daan 方言の方言所属を決定できる可能性が高まるといえる。

次に、具体的に比較する言語現象は 2 点ある。1 つはチベット文語形式（以下「藏文」）と口語形式との対応関係で、瞿霏堂・金效静 (1981) や西 (1986) など多くの先行研究にならって、藏文と口語形式の対応関係を明らかにし、その類型について迪慶州のチベット語の事例と対比する。もう 1 つは語形式の分析で、Daan 方言において形式・語義の面で藏文と一致しない語を中心に、それが迪慶州のチベット語と共有するか否かを調べる。

以上の作業を通して、Daan 方言の方言所属が明らかになることが予測される。

## 2 Daan 方言の音体系

### 2.1 音体系の素描

まず Daan 方言の音体系全体について、超分節音、母音、子音、音節構造の順に紹介する。

#### 超分節音

4 種の声調が認められ、それぞれ語単位にかかる。

ˉ : 高平            ˊ : 上昇            ˋ : 下降            ˆ : 上昇下降

#### 母音

ほとんどの母音について、長短および鼻母音/非鼻母音の対立が存在する。

i	u	ɯ u
e	ə ə	o
ɛ		ɔ
a	ɑ	

## 子音

子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>			k <sup>h</sup>	
	無声無気	p	t			k	ʔ
	有声	b	d			g	
破擦音	無声有気		ts <sup>h</sup>	tʂ <sup>h</sup>	tɕ <sup>h</sup>		
	無声無気		ts	tʂ	tɕ		
	有声		dz	dʒ	dʑ		
摩擦音	無声有気		s <sup>h</sup>	ʂ <sup>h</sup>	ɕ <sup>h</sup>	x <sup>h</sup>	
	無声無気	ɸ / f	s	ʂ	ɕ / ç	x	h
	有声	v	z	ʐ	ʑ	ɣ	fi
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ	
流音	有声		l	r			
半母音	有声	w			j		

## 音節構造

音節構造は、鈴木 (2005) を参照して以下のように記述できる。

<sup>c</sup>C<sub>i</sub>GVC および CC<sub>i</sub>GVC

このうち C<sub>i</sub> (主子音) と V (音節核の母音) が必須である。

最初頭子音 <sup>c</sup>C は前鼻音、前気音の 2 種のみが現れる。わたり音 G は /w, j/ に限定される。よって最大の初頭子音の構造は 3 子音連続となる。前鼻音を含む音節についてのみ、その鼻音要素の発音の仕方から、<sup>c</sup>C<sub>i</sub> と CC<sub>i</sub> に分けられ、後者の方が鼻音要素の調音時間が長い。

末子音は /w, j/ に限定され、かつまれにしか現れない。したがって、Daan 方言では基本的に開音節となる。

## 2.2 音体系からみる Daan 方言の特徴

先に示した Daan 方言の音体系について、チベット語方言学的観点から見て特徴的な点を簡潔にまとめると、以下のような点があげられる。



- |                     |                   |
|---------------------|-------------------|
| 1. 声調の存在            | 5. /r/と/z/の対立     |
| 2. 中舌円唇/非円唇母音の存在    | 6. 無声鼻音・無声流音の欠如   |
| 3. 有声阻害音・無声有気摩擦音の存在 | 7. 前鼻音における2つの発音様式 |
| 4. 両唇・唇歯摩擦音の存在      | 8. 基本的に開音節となる音節構造 |

以上の1.および3.の特徴から、Daan方言はカムチベット語の一種であると判断できる。この観点から考えると、6.の特徴はカムチベット語としては類例の少ない、特殊な事例であると考えられる。4.や5., 7.および8.といった特徴は少数ではあるが類似の特徴をもつ方言が存在する。

### 3 Daan方言における蔵文と口語形式の対応関係

蔵文と口語形式の対応関係は、チベット語方言の特徴を分析する伝統的な手法であり、さまざまな先行研究において一定の注目すべき対応関係が示されている。ただし注目すべき点が分析の対象となる方言によって異なってきて、必ずしも先行研究に扱われる通りの特徴を見るだけでは十分でない。この議論は現代の方言の分析であるものの、通時的な議論にも通じる。個別方言の分析と方言比較の手法によって、方言所属を問題にする場合にはかなりの精度の結果を得ることが可能となる。

ここでは、西(1986)や西田(1987)などに提示される特徴を中心に、さらに鈴木(2008b)で示されている迪慶州のチベット語方言で注目される特徴を考慮に入れつつ、Daan方言における現象を整理する。ただし、声調については蔵文との対応関係の面でおお不透明な部分もあるため、本稿では扱わない。なお、蔵文はWylie式の転写で示す。チベット文字の表す音価は格桑居冕・格桑央京(2004: 379-390)を参照。

#### 3.1 初頭子音

##### 3.1.1 閉鎖・破擦・摩擦音の有声性

Daan方言では、閉鎖・破擦音および摩擦音について、蔵文で基字に先行する子音がない有声音字 g, j, d, b, dz, zh, z は、基本的にそれぞれの調音点の無声無気音に対応する。たとえば、以下のようなようである。

鈴木 納西文化圏のチベット語・永勝県大安 [Daan] 方言の方言所属

ˈpu ru: 「チベット人」 (*bod rigs*)      ˈʂwa 「帽子」 (*zhwa*)  
ˈtō 「熊」 (*dom*)      ˈsō 「銅」 (*zangs*)

また、これらの文字に足字がある場合も同じく無声無気音に対応する。たとえば、以下のようである。

ˈcwa: 「ねずみ」 (*byi ba*)      ˈtu: 「6」 (*drug*)  
ˈtçū 「着る」 (*gyon*)      ˈtə 「尋ねる」 (*dri*)

以上の蔵文有声音字に先行子音（頭字，前接字）が存在するとき，Daan 方言では有声音で現れる。たとえば，以下のようである。

ˈfi gu: 「9」 (*dgu*)      ˈfi dza 「漢族」 (*rgya*)  
ˈfi dʒwa 「蚤」 (*lji ba*)      ˈfi zɔ: 「4」 (*bzhi*)  
ˈfi bja wa 「蛙」 (*sbal ba*)      ˈji zō 「晴れる」 (? *bzang*)

「晴れる」の例の第1音節は対応する蔵文が不明であるため，?で示している。なお，蔵文 *dbugs* 「空気」の対応形式も有聲閉鎖音が現れ，<sup>fi</sup>bo: となる。

### 3.1.2 蔵文 sh, zh 対応形式

Daan 方言では，基本的にそり舌摩擦音が対応する。たとえば，以下のようである。

ˈʂʰa 「肉」 (*sha*)      ˈfi zə ɲə ˈlo 「おとどし」 (*gzhis nyin lo*)  
ˈʂʰə: 「しらみ」 (*shig*)      ˈfi zɔ: 「4」 (*bzhi*)

### 3.1.3 蔵文 c, ch, j 対応形式

Daan 方言では，基本的にそり舌破擦音が対応する。たとえば，以下のようである。

ˈtʂʰɔ 「水」 (*chu*)      ˈɲ dʒwo 「納西族」 (*ˈjang*)  
ˈh tʂɔ: 「10」 (*bcu*)

### 3.1.4 藏文足字 y 対応形式

藏文足字 y 対応形式のうち、問題となるのは大きく藏文 Py 対応形式と Ky 対応形式に分かれる。

藏文 Py は、p, ph, b に足字 y を伴う形式を含む形式についていう。

Daan 方言では、基本的に前部硬口蓋摩擦音が対応する。たとえば、以下のようなものである。

ʔ<sup>h</sup>e 「開ける」 (*phye*)                      ʔca 「鶏」 (*bya*)

藏文 Ky は、k, kh, g に足字 y を伴う形式を含む全ての対応形式についていう。

Daan 方言では、基本的に前部硬口蓋破擦音が対応する。たとえば、以下のようなものである。

ʔ<sup>h</sup>dza 「漢族」 (*rgya*)                      ʔ<sup>h</sup>dzuu: t<sup>h</sup>o 「速い」 (*mgyogs*)  
ʔ<sup>h</sup>tɕwo nə 「酸っぱい」 (*skyur*)

### 3.1.5 藏文足字 r 対応形式

藏文足字 r を含む形式には、Pr (=pr, phr, br を含む形式), Kr (=kr, khr, gr を含む形式), tr, dr など閉鎖音を含むもののほか、sr などもある。

Daan 方言では、藏文 sr を除いて基本的に藏文足字 r に対応する音が存在しない。つまり、藏文足字 r が先行する子音に影響を与えることなく脱落したものと考えられる。たとえば、以下のようなものである。

ʔ<sup>h</sup>a 「鷹」 (*khra*)                      ʔ<sup>h</sup>gwə 「行く」 (*'gro*)  
ʔtuu: 「6」 (*drug*)                      ʔ<sup>h</sup>bo: 「ミツバチ」 (*sbrang*)

ほかにも、藏文 Pr 対応形式の中には軟口蓋摩擦音に対応すると見られる例もある。頭字を伴わない藏文 Pr 対応形式の例は、以下のようなものである。

ʔ<sup>h</sup>a: 「かき」 (*brag*)                      ʔxu: 「書く」 (*bri*)  
ʔxu: / ʔ<sup>h</sup>xu: 「子供」 (*phrug*)

頭字を伴う藏文 Pr 対応形式である藏文 spr, sbr については、次のような対応関係が見られる。

ˈxõ ja 「猿」 (*spre'u* ?)                      ˈɣũ: 「ハエ」 (*sbrang*)  
 ˈʰvu: 「蛇」 (*sbrul*)

頭字を伴わない蔵文 Pr 対応形式と共通する例もあるが、「蛇」のように調音点の異なるものもある。この対応関係を考えれば、ˈxũ ja 「雲」も第 1 音節初頭子音は蔵文 *sprin* に対応するように見えるが、母音の形式が一致せず別語源と考えられる。なお、「ミツバチ」と「ハエ」は同じ蔵文 *sbrang* の対応形式であるが、異なる音形式をとる。しかし、いずれも蔵文対応形式とみなすことができる。さらに、同様の例が rGyalthang 方言など他方言にも見られるため、注目に値する。

さらに蔵文初頭子音 ˈbr を含むものは、前鼻音つき軟口蓋閉鎖音に対応すると見られる例もある。たとえば、以下のようなものである。

ˈɟgu: 「米」 (*'bras*)                      ˈɟgwə 「雷」 (*'brug*)

蔵文 sr については、基本的な対応形式に前気音を伴う歯茎無気摩擦音が対応する。たとえば、以下のようなものである。

ˈhso 「薄い」 (*srab*)                      ˈhsa 「硬い」 (*sra*)

### 3.1.6 蔵文基字 l, y 対応形式

Daan 方言では、基本的にそれぞれ /l/, /j/ が対応する。たとえば、以下のようなものである。

ˈl̥ 「道」 (*lam*)                      ˈja la 「枝」 (*jal ga*)  
 ˈla ˈɟgo 「手」 (*lag 'go*)                      ˈʰji: ma 「花椒」 (*g.yer ma*)

ただし蔵文 y 対応形式には /z/ になるものもあり、たとえば ˈzi ɣu 「本」 (*yi ge*) があるが、ˈji ɣu の方がよく用いられる。しかしこれは当地の漢語における /#i/ に [ji] と [zi] の自由変異が認められることに影響を受けている可能性もある。

### 3.1.7 蔵文 lh 対応形式

Daan 方言では、基本的に軟口蓋摩擦音が対応する。たとえば、以下のようなものである。

`xa 「神」 (*lha*)

`x<sup>h</sup>ɔ 「靴」 (*lham*)

### 3.1.8 蔵文足字 w 対応形式

Daan 方言では、わたり音としての/w/が口語音に現れる例がある。たとえば、以下のようである。

`<sup>h</sup>tswa 「草」 (*rtswa*)

´rwə rwə 「角 (つの)」 (*rwa*)

しかし、`ts<sup>h</sup>a 「塩」 (*tshwa*) などには/w/が現れない。

### 3.1.9 蔵文 s+共鳴音字を含む形式

蔵文共鳴音字には、各種鼻音および l と r がある。このうち sr についてはすでに上に述べた。

Daan 方言では、蔵文鼻音字に頭字 s を伴う形式には基本的に異なる調音点の摩擦音が対応する。たとえば、以下のようである。

´ne çö 「狂人」 (*mi smyon*)

´<sup>h</sup>xā 「鼻」 (*sna*)

`çī dɕwə 「かわいそう」 (*snying rje*)

「鼻」の例は摩擦音に前鼻音が伴う例である。前鼻音の有声性については、音声学的に明示している。

また、蔵文基字 s に足字 l を伴う形式には軟口蓋摩擦音が対応する。たとえば、以下のようである。

`xa 「編む」 (*sla*)

`xɔ 「学ぶ」 (*slob*)

### 3.1.10 前鼻音を含む子音連続

Daan 方言の前鼻音を含む子音連続は、前鼻音要素に後続する子音に無声有気音と有声音がある。この口語形式は蔵文との対応関係とうまく一致する点が多い。前鼻音要素と後続する子音は、調音点、有声性についてはほぼ一致する。たとえば、以下のようである。

ʰgo lo 「頭」 (*mgo* ?)                      ʰkʰa wa 「胆のう」 (*mkhal ba*)  
 ʰdzur: tʰo 「速い」 (*mgyog pa*)              ʰtʰsʰa: 「食べる」 (*'chag*)

ほかに、ʰxā 「鼻」 (*sna*) のような例がある。これは鼻音の初頭子音と関連があると見られるが、軟口蓋鼻音のみに限られる。

### 3.1.11 そのほかの特徴

以上に触れなかった対応関係の中で、Daan 方言において特に興味深い現象に、藏文歯茎音字 (*s, ts* など) を含む形式で、口語形式において母音が前舌狭母音/*ɪ*/であるかわたり音/*ɟ*/が後続する場合、その初頭子音が前部硬口蓋音に対応するというものがある。たとえば、以下のようである。

ʰɕʰɪ 「心」 (*sems*)                              ʰdzi: nə 「美しい」 (*mdzes*)  
 ʰɕi: 「金」 (*gser*)                                ʰɕjɛ ma 「大豆」 (*sran ma*)

## 3.2 母音および母音 + 末子音

基本的な対応関係は以下のように示すことができる。ただし、藏文再添後字 *s* は口語形式に明確な対応関係を得られないため、以下の表では省略する。また、いくつかの対応形式は不明であるため、空白にしてある。

V\C	#/'	b	d	g	m	n	ng	r	l	s
a	a	ɔ	a:	ɑ: / a:	ɑ: / ɔ:	ɛ̃	ɔ: / ɔ̃	u:	ɛ: / a	ɛ: / u:
i	ɔ / ə			u: / ə:	ũ / ɔ̃	ĩ	ĩ / ɔ̃			i:
u	ɔ / u		u:	o: / u:	õ / ũ	ẽ / ẽ̃	ũ		u:	u
e	ɔ		e:		ĩ			i:	i:	i:
o	o		u / e	ɔ / o	õ	ũ	õ		u	u:

Daan 方言では、必ずしも藏文との対応関係は一対一になるとは限らず、上に示したのは1つの傾向である。

基本的な傾向として、藏文で開音節のものは短母音と対応し、末子音が鼻音の場合は鼻母音、それ以外の末子音の場合は長母音と対応するように見える。

母音の音価に注目すると、開音節の場合、蔵文母音 a および o 以外は口語で音質が変わっている点が特徴的である。蔵文母音 i, u, e 対応形式の例を挙げると、次のようなものがある。

ʼno 「人」(*mi*)

ʼno 「火」(*me*)

ʼtʂ<sup>h</sup>o 「水」(*chu*)

蔵文で末子音をもつ場合でも、それに対応する口語形式で母音の音価が変わることが多い。また、末子音が鼻音であるものについても、口語形式で鼻母音が現れない例が見られ、たとえば以下のようなものである。

ʰdʒwo 「納西族」(*'jang*)

ʂ<sup>h</sup>i p<sup>h</sup>o 「木」(*shing phung*)

また、上記「納西族」の例などいくつかの個別例ではわたり音 w, j が生じるが、それらは一律上表に記載していない。

## 4 迪慶州のチベット語方言との比較

議論に先立ち、迪慶州のチベット語の方言分類について述べておく。瞿霽堂・金效静(1981)や張済川(1993)などの先行研究は、迪慶州チベット語がカムチベット語の中の独立した方言群であると述べていた。しかし筆者は鈴木(2008b)において、主に「破擦音・摩擦音の来源」および「蔵文 l, y 対応音」の2つの蔵文との対応関係に基づいて、まず3つの方言群に分類でき、そのうち2つはそれぞれさらに3つの下位方言(群)に分けられることを明らかにした。その分類を以下に示す。個別方言について先行研究があるものは、主なものを添える。

### 1. Sems-kyi-nyila 方言群

- (a) rGyalthang 下位方言群 (Hongladarom (1996), 《雲南省誌》(1998: 421–441) など多数)
- (b) 雲嶺山脈東部下位方言群 (鈴木 2009)
- (c) Melung 下位方言群 (鈴木, ツェリ・ツォモ 2007)

### 2. nJol 方言群

- (a) 雲嶺山脈西部下位方言群 (鈴木 2008a)
- (b) sPomtserag (奔子欄) 方言 (鈴木 2009)
- (c) gYagrwa (羊拉) 方言

### 3. gTorwa (東旺) 方言 (Bartee 2007)

これらの方言群は、Sems-kyi-nyila 方言群がカムチベット語の中で独立した方言群 (張済川 (1993) などのいう迪慶州チベット語がこれを指す) である以外は、隣接する地域のチベット語方言とともにさらに大きな方言群を形成している。すなわち、nJol 方言群は sDerong 方言群とともに sDerong-nJol 方言群を形成し、gTorwa 方言は Chaphreng 方言群に含まれる 1 方言である。なお、以下では混乱のない限り sDerong-nJol 方言群のことを単に nJol 方言群と呼ぶ。

以下、比較の際に Daan 方言は老年層の発音に基づく形式を用いる。若年層との差異が有意な場合は当該箇所で見及する。

## 4.1 蔵文対応形式に関する比較

ここでは、以上の迪慶州チベット語の分類基準を考慮に入れつつ、分布の観点から見て gTorwa 方言を除く迪慶州のチベット語方言と Daan 方言の比較を試みる。なお、西藏自治区芒康県は nJol 方言群の分布地域と隣接しているが、初歩的な分析の結果、芒康県の方言のいくつかは nJol 方言群に属しておらず、mBathang (巴塘) 方言などが含まれるカムチベット語南路方言群に属するものと考えられる。

以下、比較の際には Sems-kyi-nyila 方言群から rGyalthag (大中甸) 方言、Byagzhol (霞若石茸) 方言 (雲嶺山脈東部下位方言群)、Melung (維西永春) 方言を、nJol 方言群から nJol (升平) 方言 (雲嶺山脈西部下位方言群) を選んで対照する。また、必要に応じて他の方言についても言及する。なお、西藏自治区芒康県のチベット語方言のうち、雲南省と接する塩井郷の Tshwakhalho 方言は、おおむね nJol 方言群の雲嶺山脈西部下位方言群に近い特徴を見せる。

### 4.1.1 初頭子音

3.1.1 で扱った子音の有声性、3.1.2 で扱った蔵文 sh, zh 対応音、3.1.8 で扱った蔵文足字 w 対応音および 3.1.10 で扱った前鼻音を含む子音連続に関しては、Daan 方言とすべての迪慶州チベット語について共通する対応関係を見せるといえる。



語義	藏文	Daan	rGyalthang	Byagzhol	Melung	nJol
茶	<i>ja</i>	ʼtʂa	ʼtʂa	ʼtʂa	ʼtʂa	ʼtʂa
帽子	<i>zhwa</i>	ʼʂwa	ʼʂwa:	ʼʂwa	ʼʂwa	ʼʂu wa
9	<i>dgu</i>	ʼfiɡu:	ʼfiɡu	ʼfiɡu	ʼfiɡu	ʼfiɡu
4	<i>bzhi</i>	ʼfiʒɔ:	ʼfiʒɔ	ʼfiʒɔ	ʼfiʒa	ʒɔ
空気	<i>dbug</i>	ʼfibo:	ʼfibu?	ʼfibu?	ʼbo?	—
草	<i>rtswa</i>	ʼhtswa	ʼhtswa	ʼhtswa	—	—
頭	<i>mgo</i>	ʼɰgo lo	ʼɰgwa	ʼɰgwo	ʼmu fio	ʼɰgo
食べる	<i>'chag</i>	ʼɰtʂʰa:	ʼɰtʂʰa:	ʼɰtʂʰa	ʼɰtʂʰa	—

一方で、3.1.7 で扱った藏文 lh 対応形式、3.1.9 で扱った藏文 s+共鳴音字を含む形式、および 3.1.11 で述べたそのほかの特徴は Daan 方言に独特であり、迪慶州チベット語について特徴を共有しない。

語義	藏文	Daan	rGyalthang	Byagzhol	Melung	nJol
神	<i>lha</i>	ʼxa	ʼla	ʼla	—	ʼla
鼻	<i>sna</i>	ʼɰxã	ʼnã	ʼna	ʼhna	ʼnɔ̃
学ぶ	<i>slob</i>	ʼxɔ	ʼhɰo?	ʼhɰɔ:	—	ʼɰow?
金	<i>gser</i>	ʼhɕi:	ʼhsɰ:	ʼhsə:	ʼhsʰɛ:	ʼhsaj
豆	<i>sran ma</i>	ʼɕjɛ ma	—	ʼhsɛ: tʰi?	ʼhsã ma	—

さて、破擦音/摩擦音の対応関係に関する点 (3.1.3, 3.1.4, 3.1.5) は、Suzuki (2008a) で議論されているように、複雑な様相を見せる。迪慶州チベット語の諸方言についても相当な差異が見られるため、以下に詳しく述べる。

語義	藏文	Daan	rGyalthang	Byagzhol	Melung	nJol
水	<i>chu</i>	ʼtʂʰɔ	ʼtʂʰu	ʼtʂʰu	ʼtʂʰu	ʼtʂʰu
鶏	<i>bya</i>	ʼɕa	ʼɕa	ʼɕa	ʼɕa	ʼɕa
漢族	<i>rgya</i>	ʼfiɖza	ʼfiɖza	ʼɖza:	ʼfiɖza	ʼfiɖza
髪	<i>skra</i>	ʼhka	ʼhtɕa:	ʼhtɕa:	ʼhka	ʼtʂa: pɣ
6	<i>drug</i>	ʼtu:	ʼto?	ʼtʂo?	ʼto?	ʼtʂo?
書く	<i>bri</i>	ʼxu:	ʼɕɔ	ʼtɔ	—	ʼtʂɔ
猿	<i>spre'u</i>	ʼxɔ ja	ʼʔa ɕu:	ʼɕɔ ma	ʼpu:	ʼhtʂɛ: wu

「水」が示すように、藏文 *c, ch, j* 対応形式は、Daan 方言と Sems-kyi-nyila 方言群の方言が一致する。「鶏」「漢族」が示すように、藏文足字 *y* 対応形式は、Daan 方言と迪慶州チベット語諸方言は一致している。残りの 4 例が示すように、藏文足字 *r* 対応形式は複雑で、Melung 方言と若干の共通点を見出せるほかは、一致しない。このことから、Daan 方言における破擦音/摩擦音の対応関係は迪慶州チベット語諸方言と完全には並行しないことが分かる。しかしその中でも一致する点の多いものとして Melung 方言を挙げることができ、Sems-kyi-nyila 方言群 Melung 下位方言群と音変化の方向性が最も近いということがいえる。

Suzuki (2008b) で取り上げた藏文 *l, y* 対応音に関する点 (3.1.6, 3.1.7) では、迪慶州チベット語諸方言について明確に二分することができる。藏文 *l* 対応音に注目すると、*l/* で対応する方言と *j/* で対応する方言に分かれる。Daan 方言は前者の対応を見せるが、これと同様の対応関係を見せる方言は Sems-kyi-nyila 方言群のすべての方言と nJol 方言群雲嶺山脈西部下位方言群の Budy (巴迪) 方言、Foshan (佛山) 方言である。この対応関係は、芒康県のチベット語方言にもあてはまる。

語義	藏文	Daan	rGyalthang	Byagzhol	Melung	nJol
手	<i>lag pa</i>	<i>ʎa<sup>h</sup>go</i>	<i>ʎaʔ ka</i>	<i>ʎo kwa</i>	<i>ʎəʔ kwa</i>	<i>ʎa<sup>h</sup>kwa</i>
花椒	<i>g.yer ma</i>	<i>ʎi: ma</i>	<i>ʎe wā</i>	<i>ʎju: ma</i>	—	<i>ʎa ma:</i>

nJol 方言では、藏文 *y* に対して *j/* が対応する例と *z/* が対応する例の 2 種類がある。後者のものには *ʎə gx* 「本」(*yi ge*) や *ʎə leʔ* 「軽い」(*yang ?*) などがある。この方言では少なくとも Daan 方言の事例とは異なり、異なる音環境にある複数の例で藏文 *y* と *z/* が対応する点で、藏文 *l* 対応形式と合わせて nJol 方言群 (Budy 方言と Foshan 方言は除く) と Daan 方言は並行的でないことがいえる。

#### 4.1.2 母音 + 末子音

Daan 方言における母音 + 末子音の音対応の類型は、藏文の開音節に対応する口語音や藏文の閉鎖音末子音を含む例に対応する口語音は、同方言に特徴的であって迪慶州チベット語とは異なる。このため、方言比較という観点から考えれば、母音 + 末子音の形式は比較する必要性はあまりない。

その中で母音の音質の変化について、最も際立つ対応関係を 1 点あげる。それは Daan 方言において藏文 *im* に口語で後舌狭母音が対応する点である。

語義	藏文	Daan	rGyalthang	Byagzhol	Melung	nJol
家	<i>khyim</i>	ṽtɕ <sup>h</sup> ü	ṽtɕ <sup>h</sup> ö	ṽtɕ <sup>h</sup> u: / ṽtɕ <sup>h</sup> ö	ṽtɕ <sup>h</sup> əŋ	—
おいしい	<i>zhim po</i>	ṽʂö nə	ṽʂö nə	ṽʂə: nə	ṽʂəŋ	ṽʂö <sup>m</sup> bo

Melung 方言では異なる対応関係を見せることが分かるが、Daan 方言の形式がその他の Sems-kyi-nyila 方言群でも nJol 方言群でも全般に見られることがわかる。ところがこの対応関係は、迪慶州チベット語以外ではあまり存在しない。

#### 4.1.3 比較の結果

以上に述べた点を総合的に考えると、Daan 方言は藏文初頭子音の音変化について Sems-kyi-nyila 方言群の中の雲嶺山脈東部下位方言群および Melung 下位方言群と特徴が似ていることが分かった。中でも藏文足字 r を含む例に関しては、ほぼ Melung 下位方言群のもつ音変化の方向性と共通することが分かった。母音 + 末子音に関しては、Daan 方言で末子音がほぼ脱落するという特徴を除き、先行母音の音変化の特徴は Sems-kyi-nyila 方言群全般に類似するため、方言区分の参考にはあまり有効ではない。

Daan 方言は Melung 方言と「藏文頭字 s を伴う共鳴音」や「母音 + 末子音 im」の対応形式において一致しない点が確認されるけれども、先行研究における方言分類では初頭子音の破擦/摩擦音の音対応に関する指標がかなりの程度有効であることが確認されることから、Daan 方言は Sems-kyi-nyila 方言群の中の Melung 下位方言群に最も近い音変化をたどっていることを考慮し、これを方言の系統関係が近いと判断することに一定の妥当性があると考えられる。

## 4.2 語彙項目に関する対照

次に、Daan 方言の語彙項目において、藏文と一致しないものについて迪慶州のチベット語方言との対照を行う。その際、上と同様に rGyalthang 方言、Byagzhol 方言、Melung 方言、nJol 方言を選んで考察する。必要に応じて他の方言についても言及する。

なお、現段階で Daan 方言に全く独自のもの（ナシ語からの借用語も含む）や明らかな漢語からの借用語は扱わない。

### 4.2.1 藏文と対応関係が見られる中での特殊な形式

まず、特殊と判断できる形式の例を挙げる。参考として、一般的な藏文形式を添える。

語義	Daan	rGyalthang	Byagzhol	Melung	nJol	藏文
うさぎ	<sup>h</sup> pu jā	ʼrə gō	<sup>h</sup> pu: jaʔ	<sup>h</sup> poŋ jaŋ	ʼrə gō	<i>ri bong</i>
月	<sup>h</sup> lu gū	<sup>h</sup> da wa	<sup>h</sup> lə ga:	<sup>h</sup> la wa	<sup>h</sup> la wa	<i>zla dkar</i>
犬	<sup>h</sup> tsa	<sup>h</sup> tsə	<sup>h</sup> tsə	<sup>h</sup> tsə	<sup>h</sup> tsə	<i>khyi</i>
行く	<sup>h</sup> gwo	<sup>h</sup> gwə	ʼŋə / ʼŋgə	<sup>h</sup> go	<sup>h</sup> dʒɤ	<i>'gro</i>
兄	<sup>h</sup> ʔa wo	<sup>h</sup> ja:	ʔa wo	ʔa wu	<sup>h</sup> ʔa to:	<i>a bo</i>
人	ʼnə	ʼnə	ʼnə	ʼmə	<sup>h</sup> mə	<i>mi</i>
米	<sup>h</sup> gur:	<sup>h</sup> gur:	ʼti ma	<sup>h</sup> tə ma	<sup>h</sup> dʒi:	<i>'bras</i>
21	ʼni ʂə <sup>h</sup> tʂə	ʼnə ʂu <sup>h</sup> tsa: hʔeiʔ	ʼnə ʂ <sup>h</sup> u <sup>h</sup> tsa: tciʔ	ʼni ʂ <sup>h</sup> u <sup>h</sup> tʂuʔ	ʼni ʂ <sup>h</sup> u <sup>h</sup> tsa: hʔeiʔ	<i>nyi shu</i> <i>rtsa gcig</i>

「うさぎ」の形式は藏文 *spang g.yag* 「草原のヤク」に対応すると考えられる。この形式は迪慶州のチベット語方言で全般的に見られる。Bartee (2007: 525) にも記載がある。ただし、Daan 方言と Melung 方言では、語末に鼻音が確認される点で完全に *spang g.yag* に対応するわけではない。この鼻音要素の発生の要因は不明である。

「月」は Daan 方言の形式が藏文 *zla dkar* と完全に対応するとは言い切れないが、もしそうであるならば Byagzhol 方言と共通する。「月」の形式は迪慶州のチベット語方言内でもさまざまな語形が見られる。詳細は鈴木 (2008c) を参照。

「犬」は規則的な藏文 *khy* 対応形式ではないが、迪慶州のチベット語方言の多くが歯茎破擦音として現れる。その点で調音点はそれらと同様であるが、無気音であるのが異なっている。これは迪慶州のチベット語方言では gYagrwa 方言で <sup>h</sup>tə 「犬」という形式があるほか、迪慶州に北接する郷城県のチベット語方言では、ほぼ <sup>h</sup>tsə といった形式が用いられていて (鈴木 2007)、Daan 方言の形式はまったく特殊なものというわけではない。

「行く」は藏文 *'gro* から *r* が脱落した形式に対応する。この対応関係は Daan 方言では規則的であるが、迪慶州のチベット語方言のうち Sems-kyi-nyila 方言群の方言は基本的に Daan 方言と近い形式を見せる点が注目できる。

「兄」は方言差の激しい語であり、Daan 方言の形式が Sems-kyi-nyila 方言群雲嶺山脈東部下位方言群の方言と近いことが分かる。

「人」は藏文 *mi* と関連のある形式であると考えられ、いくつかの Sems-kyi-nyila 方言群の方言と共通の形式を見せる。詳細は Suzuki (2009) を参照。

「米」の形式は 3.1.5 で藏文 *'bras* と対応する可能性を指摘したが、rGyalthang 方言と

共通する。rGyalthang 方言では、この音対応は例外とみなされる。

「21」は蔵文では 4 音節形式をとるが、Daan 方言は 3 音節形式であり、Melung 方言と共通する。ただし Daan 方言では「21」から「99」のすべてのさりの悪い数字が 3 音節形式となるが、Melung 方言では 20 台のみが 3 音節で、30 台以上は 4 音節になる点で異なりがある。

#### 4.2.2 蔵文と対応しない形式

語義	Daan	rGyalthang	Byagzhol	Melung	nJol
雲	˘xü ja	ˉcī	ˈlə ju:	ˉpəʁ	ˉ <sup>h</sup> tʂē
牛	ˉɕwo	ˉɕo ta	ˈpə lö	ˈpa lä:	ˈpa
子ぶた	ˈp <sup>h</sup> je	ˈp <sup>h</sup> je	ˈp <sup>h</sup> je ka	—	ˈp <sup>h</sup> ɑʔ lu
もの	˘ci wa	˘ce wa	˘tʂə laʔ	—	ˉce pa
2	˘mɔ	ˉ <sup>fi</sup> nɔ̄j	ˉni:	˘mɔ̄	ˉ <sup>fi</sup> nɔ̄
12	ˉ <sup>h</sup> tʂo: mɔ	ˉ <sup>h</sup> tʂo: nɔ	ˉ <sup>h</sup> tʂo: nɔ	ˉtʂo mɔ	ˉtɕo: nɔ
猫	˘ʔa ljɔ:	˘ʔa ljɯ	ˉlu lu	˘ci la	ˈli la
姉	˘ʔa mje	˘ʔa tɕe	˘ʔa zɕ	˘ʔə zɕ	˘ʔa pɣ

「雲」は Qidzong (塔城其宗) 方言 (Sems-kyi-nyila 方言群雲嶺山脈東部下位方言群) の形式 ˘nɔ̄ joʔ に対応する形式であると考えられる。

「牛」の形式は rGyalthang 方言の形式の第 1 音節に相当する。

「子ぶた」の形式は rGyalthang 方言と一部の雲嶺山脈東部下位方言群の方言に共通する。

「もの」の形式は迪慶州のチベット語方言全般に見られるものといえる。

「2」の形式は Melung 方言のほか Yanmen (燕門) 方言 (nJol 方言群雲嶺山脈西部下位方言群) にのみ見られる際立つ形式である。詳細は Suzuki (2009) を参照。ただし Daan 方言の若年層の発音では ˘ni: となる。これは蔵文 *gnyis* と対応しうる形式であるが、このような変化が起きた背景は不明である。

「12」は「2」の例に準じる。しかしここで重要なのは Daan 方言の若年層の発音で、ˉ<sup>h</sup>tʂo: <sup>fi</sup>nɔ となり、「2」とは鼻音の調音点が対応しない。しかしこの現象と平行するのが rGyalthang 方言である、ということにも注目すべきである。

「猫」の形式は rGyalthang 方言と同一の要素からできている語である。

「姉」は Nyishe (尼西) 方言 (Sems-kyi-nyila 方言群雲嶺山脈東部下位方言群) の形式 ˉmɣ mɣ に近い形式である。

#### 4.2.3 対照の結果

以上の語彙項目の対照から、Daan 方言に特徴的な形式は特に Sems-kyi-nyila 方言群の方言と共有しているものが複数存在することが明らかにされた。

蔵文と起源を異にするような語彙項目の特徴は、蔵文との対応関係と違って一定の地域性を示す場合がある。それが隣接する方言に見られればほとんど問題にはならない。ところが Daan 方言のように飛び地に分布する方言が、ある特定の方言群に見られる特徴的な語彙項目を共有している場合、これらの方言が互いに近縁である可能性が高いと判断することには十分妥当性があると考えられ、このため Daan 方言と Sems-kyi-nyila 方言群の間には比較的近い系統的な関係があると考えられることができる。

## 5 まとめ

本稿では、未記述のチベット語方言である Daan 方言について、まず蔵文と対照することを通じて同方言の音対応の特徴を明らかにし、迪慶州のチベット語方言との比較を行った。その結果、Daan 方言は少なからず独自の音対応を見せるけれども、Sems-kyi-nyila 方言群の中の Melung 方言の特徴に極めて近い特徴をもっていることが明らかとなった。また、Daan 方言の特徴的な語彙項目についても迪慶州のチベット語方言との対照を行い、近似的な語彙が Sems-kyi-nyila 方言群の中に見出せることが分かった。

この結果は、現在の方言分布および方言分類の観点から見れば、Daan 方言にもっとも近い地域に分布する方言群との類似点が多く、西藏自治区芒康県の方言とはその方言特徴において一定の距離があるものであるということを示している。それゆえ、迪慶州のチベット語方言全体に関する発展の歴史を詳細には跡づけられない現在、Daan 方言の話し手が芒康県からの移民であるという伝承を言語の面から説明することはできない。今後の研究を待たなければならない。

大安郷のチベット語話者が現在まで母語としてチベット語を伝承してきた背景には、家庭内でのチベット語使用が大きな役割を果たしてきたと考えられる。ところが現在では異なる民族間の通婚の増加や学校教育の普及によって、家庭内でも漢語の使用割合が増えてきており、チベット語 Daan 方言が消滅に瀕している状況が認められる。Daan 方言の調査・記録は急務の課題である。

## 付 記

大安郷における調査の一切は、友人である黄勁松さんの手配によって実現した。また、Daan 方言の調査協力者として主に和生文さん、和会菊さん、和生仲さんの3名の協力を得たほか、ノジュ・カーマ・ヤンジン [Nor-rgyun sKar-ma dByangs-can] さんにも調査の補助に加わっていただいた。ここに記して感謝の意を表する。

筆者による現地調査については、平成16–20年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(S)「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦，課題番号16102001)および平成19–20年度日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」の援助を受けている。

## 文 献

- Bartee, Ellen Lynn  
2007 *A Grammar of Dongwang Tibetan*, doctoral dissertation, University of California, Santa Barbara.
- 和旭東 [He, Xudong] 主編  
2001 『麗江地区民族誌』昆明：雲南民族出版社。
- Hongladarom, Krisadawan  
1996 Rgyalthang Tibetan of Yunnan: a Preliminary Report. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 19(2): 69–92.
- 格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can]  
2004 『實用藏文文法教程 [修訂本]』成都：四川民族出版社。
- 西義郎  
1986 「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11(4): 837–900; 1 地図。  
西田龍雄  
1987 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』pp. 108–169, 東京：冬樹社。
- 瞿霽堂 [Qu, Aitang]・金效靜 [Jin, Xiaojing]  
1981 「藏語方言的研究方法」『西南民族學院學報』第3期 76–74。
- 鈴木博之  
2005 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』69: 1–23。  
2007 「甘孜州郷城県カムチベット語の方言特徴」『ニダバ』36: 17–26。  
2008a 「迪慶州瀾滄江流域カムチベット語(徳欽/雲嶺/燕門/巴迪方言)の方言特徴」『ニダバ』37: 115–124。  
2008b 「迪慶藏語是康巴藏語中的“一個”次方言嗎」『康定民族師範高等專科學校學報』第3期 6–10。  
2008c 「チベット語における「心」「太陽」「月」の方言地理学的分析——“香格里拉”と *sems kyi nyi zla* の対応に関連して」『京都大学言語学研究』27: 23–48。  
2009 「迪慶州金沙江流域カムチベット語(奔子欄/尼西/拖頂/霞若/其宗方言)の方言特徴」『ニダバ』38: 29–38。
- Suzuki, Hiroyuki  
2008a *Development of the affricate series in Shangri-La Tibetan*, unpublished manuscript presented at 14th HLS (Göteborg).  
2008b */l/ - /j/ interchange in Shangri-La Tibetan*, unpublished manuscript presented at 41st ICSTLL

鈴木 納西文化圏のチベット語・永勝県大安 [Daan] 方言の方言所属

(London).

- 2009 Preliminary report on the linguistic geography for multicoloured Tibetan dialects of Yunnan, in Makoto Minegishi et al. (eds.) *Proceedings of the Chulalongkorn-Japan Linguistics Symposium*, 267–279, Tokyo : Global COE Program ‘Corpus-based Linguistics and Language Education’, Tokyo University of Foreign Studies.

鈴木博之, ツェリ・ツォモ [Tshe-ring mTsho-mo]

- 2007 「カムチベット語維西 [Melung] 方言の r 化母音とその来歴」『京都大学言語学研究』26: 93–101。

山田勅之

- 2008 「明代の雲南麗江ナシ族・木氏土司とチベット世界の関係——カルマ派との関係を中心に」『日本西藏學會々報』54: 79–92。

『雲南省誌』編纂委員會 [Yunnan Shengzhi Bianzuan Weiyuanhui]

- 1998 『雲南省誌 59 少数民族語音文字誌』昆明：雲南民族出版社。

張濟川 [Zhang, Jichuan]

- 1993 「藏語方言分類管見」戴慶廈等編『民族語文論文集—慶祝馬學良先生八十壽辰文集』pp. 297–309, 北京：中央民族學院出版社。